



び ぶ り お

University of the Ryukyus Library Bulletin Vol.35 No.1(No.133) January 2002

「昔日汗牛充棟 今朝掌上明珠」

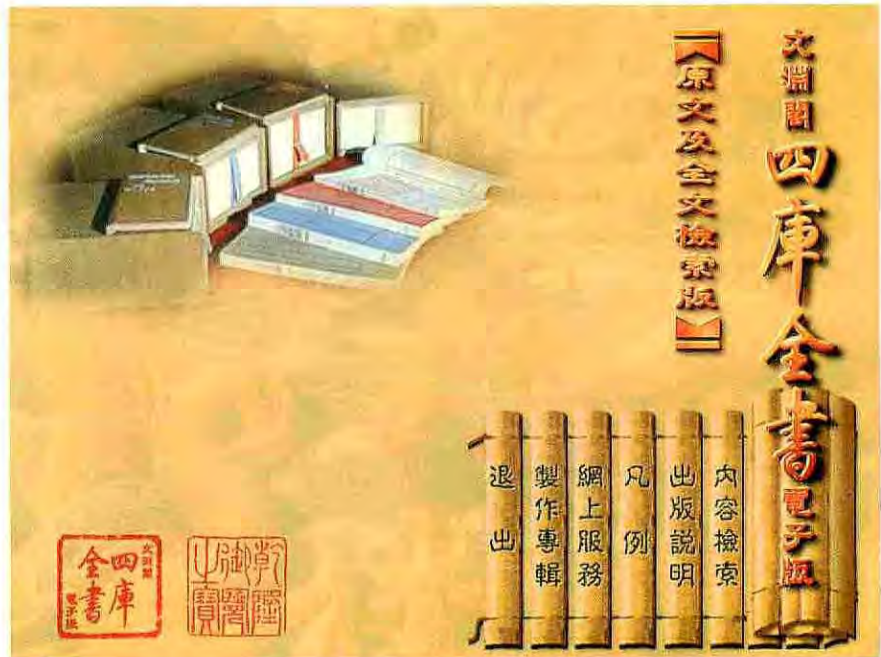
—文淵閣四庫全書電子版について—

法文学部 石崎 博志

文淵閣四庫全書電子版がこのたび我が附属図書館に導入された。これは、文淵閣四庫全書という中国古典籍の一大コレクションの全ページを画像データとテキストデータとして180枚あまりのCDに収録したものであるが、この場を借りてこの画期的な資料を紹介させて頂こうと思う。

まずは、電子版の元となった文淵閣四庫全書に関してであるが、これは凡そ中国に携わっている者で、四庫全書を知らない者はいないと思われるほど有名な叢書である。しかし、念のため概略的な説明を加えておこう。この四庫全書は、清の乾隆帝の敕命により、紀昀が総編纂官となり、二百三十人の学者の手によって一七八一年に完成した。いわば中国文化史上の至宝ともいうべき中国古典籍の一大コレクションである。分類は経・史・子・集の四部からなる。この四部分類は、さらに40類の下位分類

とともに、ふつう漢籍と総称される中国の圖書の分類方法として現在なお多くの図書館で用いられている。「経」はいわゆる儒教のバイブルである四書五経とその研究書、「史」は歴史・地理関係の書、「子」は各種思想家や科学技術関係の書、「集」は詩文や奏議等を含む文集・類書等をいい、哲学・史学・文学のみならず、自然科学・技術の分野を含



目次	次
「昔日汗牛充棟 今朝掌上明珠」	変貌する図書館 …………… 武藤良弘 5
—文淵閣四庫全書電子版について— ……石崎博志 1	文献紹介：幕末の異国船来琉記と当時の
文献で見る沖縄の歴史と風土	琉球の状況—③— …………… 豊平朝美 6
—琉球大学附属図書館貴重書展— …………… 4	お知らせ …………… 8

附属図書館のホームページ (<http://www.lib.u-ryukyu.ac.jp/>) もご覧下さい。

む伝統中国の学術全般の図書を分類整理する最も効率的な分類方法として活用されている。四庫全書に収めている書籍は、『永樂大典』に収める書、宮中の蔵書、地方で発見された書、献上された書、巷間に流布している書等あらゆる書物の中から重要なものを選び出したものである。それらを校定して写本を作り上げ、それを四部に分類し四つの書庫に分けて保存した。四庫という名はこれに基づく。そして、約十年の年月をかけて3462種、79582巻の書を写して完成した。写本は全部で七部作られ、朝廷用として宮城内の文淵閣、奉天の文溯閣、熱河避暑山莊内の文津閣、圓明園内の文源閣に、一般用に揚州大觀堂内の文匯閣、鎮江金山寺内の文宗閣、杭州聖因寺内の文瀾閣にそれぞれ収められた。七閣中、文匯・文宗の二閣は太平天國の乱で、文源閣は義和団の乱で焼失し、他のものも引き続き戦乱により移動を余儀なくされた。現在では、文淵閣のものは北京故宮博物院に、文溯閣のものは遼寧省図書館に、文津閣のものは北京図書館に、文瀾閣のものは浙江図書館にそれぞれ保管されている。

19世紀以降に刊行された図書を別にすれば、『文淵閣四庫全書』は中国の古代から乾隆期までに刊行され、当時まで現存した殆ど全ての図書を集めているので、四庫全書に収録されていない図書は殆どないといってよいほどの内容を誇る。要するに四庫全書を所蔵しておれば、乾隆以前の時代の中国研究に関しては学術の全分野において必要な

文献を獲得したことになるのである。書籍版の『文淵閣四庫全書』は、全1,500冊(洋装B5判、1冊平均800頁)は、全部で3,457種、36,000余部、巻数にして79,000余巻の書物を収める。部数の多さだけでなく、この叢書の作成から刊行に至るまでの歴史の重みにおいても、世界中のあらゆる叢書を圧倒している。

この四庫全書の書籍版は大変な高価であったので(発売当初は一千万円の値が付いていたと言われる)、本学が購入するとすれば大型コレクション扱いで購入しなければならなかった。しかし、「大型コレクション」の購入には制約があり、九州地区の国立大学のなかに1セットでもそのコレクションが所蔵されていれば、同地区に属する大学では同じものを購入することを許されない。九州地区とはいえ地理的に九州と隔絶している本学もその制約のため購入できず、書籍版の購入はどうしても諦める他なかったのである。

しかし、モノがCD-ROMになると話は別である。大型コレクションの購入の制約を受けることはない。また、価格も購入時には200万円となっており、書籍版と比べると非常に安価になっていたことにより、図書館で購入することが実現した。

四庫全書のテキスト化

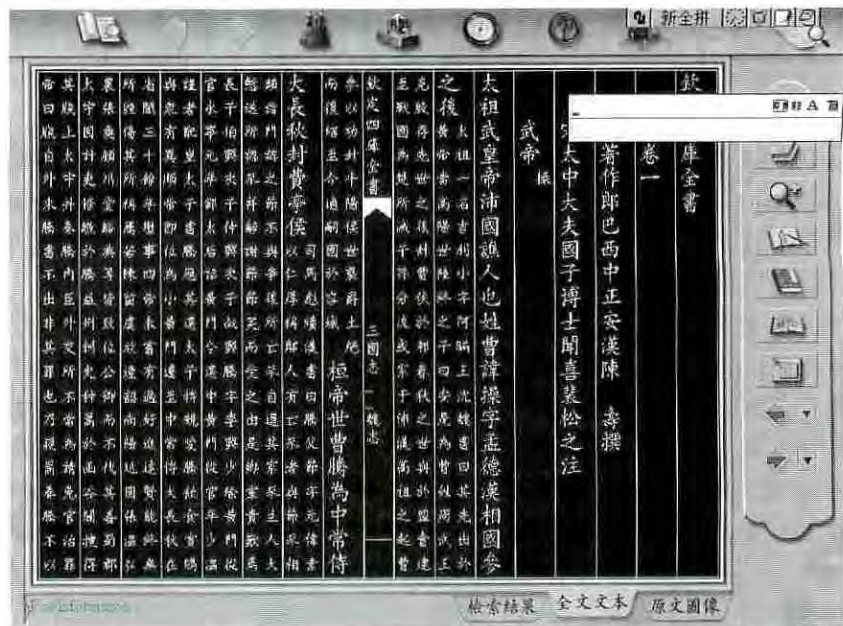
この『四庫全書』電子化のプロジェクトは、1996年にはじまった。8億字に達する膨大な情報をOCRと人手でテキストデータ化するため、最盛期には3600人のスタッフが動員された。中国でこの

四庫全書電子版が初めて発行されたときには「昔日汗牛充棟 今朝掌上明珠」と評された。つまり、昔は「ひっぱっては牛馬が汗をかき、積み上げては家の棟木にまで届くくらいの蔵書量」であったが、今日では「掌中の美しい珠」となったという意味で、この言葉のなかには万巻の書物が手の中に収まってしまいうぐらいになったことへの驚きが率直に表現されている。

この膨大なコレクションがテキスト化される意味は極めて大きい。何よりも、八億字あまりのテキストの全文検索



ができるため、そこから人物の伝記やその情報を即座に取り出すことができる。例えば、詩文の読解に関しては、詩文の中で使われる語がどのような典拠を持っているのかを明らかにしなければ、その詩を理解することはできない。そのため、典拠しらばは詩文読解には最も基礎的な作業となっている。しかし、これは同時に最も時間を費やす作業となっている。従来、特に索引のない書籍に関しては冒頭から末尾まで全てに目を通して典拠を突き止めなければならなかった。しかし、全文テキスト



版の登場によってその作業時間が大幅に短縮され、その分、多くの文献にあたることのできるようになる。また、言語研究の上では、語の用例の変遷や文法の変化を見るためのデータづくりが、たちどころにできてしまうというメリットがある。

電子版四庫全書には、書名、著者、キーワードなど多彩な検索機能が備わっており、目的の書籍が中国の書籍分類法である四部分類のどこに分類されているか知らずとも、容易に探すことができる(もちろん、中国学の基礎知識として目当ての書籍が四部分類のどれに入っているかに通暁していることは必要である)。また、原文のコピーや、該当個所の印刷も可能である。そして、電子版は四庫全書の本文のみならず、電子辞書や便利なツールも備えている。辞典・辞書類では、吉林大學出版社《四庫大辭典》や上海人民出版社の《中華古漢語字典》(附單字發音系統)、また、干支を西暦に変換する「古今紀年換算」「干支/公元年換算」なども含まれている。

四庫全書を使用する際の若干の注意事項

このように、この四庫全書電子版は極めて有用で、中国関係の蔵書が乏しい本学の悩みを一気に解決するものとなる。しかしながら、この全文検索版四庫全書を使用するときには、若干の注意が必要である。実は、四庫全書の画像データは四庫全書そのままイメージとして取り込んだものであるが、テキスト版は上記の如く、人海戦術によって入力

されたものである。そのため、若干の入力ミスなどがあることが伝えられている(例えば、「熟」を「熱」に誤るなど、いかにもOCRソフトが間違いそうなミスもある)。書籍がテキスト化されること自体は福音であるが、それに錯誤があるようでは意味がない。賢明なる学生諸氏においては、電子版の書籍を論文やレポート、レジュメに使用する際、必ず画像データとテキストデータを両方参照の上、引用してほしい。便利なものには用心が必要であることを忘れてはならない。

また、キーワードの入力は、中国語で行わなければならない。ローマ字拼音による簡体字、注音符号による繁体字、部首の分類など、ある程度中国語に習熟している必要がある。また、元となった四庫全書そのものは漢籍のコレクションとしては、比較的新しいバージョンを使用しているため、清朝の学者が引用している書物でも四庫全書のバージョンとは異なっているケースも少なくない。そういった意味では、四庫全書に収められる文献も多く流布していた版本の一つでしかなく、その使用に関してはこれまでと同様の注意を要することは言うまでもない。

どれだけ貴重なものでも使わなければ宝の持ち腐れである。中国学を志す者だけでなく、それ以外の専攻の方々にも、是非とも四庫全書を使うことをお勧めする。そして四庫全書に収められている文献を通して、中国文化の奥深さを体験してほしいと願う次第である。

(いしざき ひろし：法文学部助教)

文献で見る沖縄の歴史と風土 琉球大学附属図書館貴重書展

附属図書館では2月6日(水)から11日まで、那覇のパレットくもじリウボウホールで所蔵貴重書展「文献で見る沖縄の歴史と風土」を開催します。附属図書館は1950年の開館以来、沖縄関係資料をひとつの核として文献資料の収集に努めてきました。沖縄関係資料には、伊波普猷文庫、仲原善忠文庫、仲宗根政善文庫、新しいところでは昨年寄贈を受けた崎原貢文庫など、先人たちが遺した貴重な個人蔵書が含まれ、今日の沖縄学研究に欠かせない資料となっています。

これらの資料を公開する目的で、これまで図書館本館において毎年1回計8回にわたって、所蔵資料の展示会を行ってきました。今回の展示会では、それらの経験を踏まえ、沖縄の歴史と風土を広く一般に紹介する目的で、伊波普猷文庫や仲原善忠文庫の「おもろさうし」、さまざまな江戸上り図、ホールやペリーの航海記など、代表的な沖縄関係資料を取り上げて展示します。また附属図書館の近年の成果である文献の電子化資料も併せて展示し、パソコンをとおし公開します。

学外での展示は今回が初めてになりますが、これを機に、できるだけ多くのみなさんに、琉球大学の貴重書に親しんでいただければ幸いです。

会 期：

2002年2月6日(水)～11日(月)
10:30～20:00 (11日は18:00まで)

場 所：

リウボウホール (パレットくもじ7階)

入場料：無料

展示品：約100点

内 容：

1. おもろさうし
「おもろさうし」(仲吉本、田島本、仲原本)、
「混効験集」ほか
2. 近世の琉球国
「喜安日記」、「女官おさうし」、「聞得大君
加那志様御新下日記」、「琉球諸島海路図
巻」ほか
3. 江戸上り
「琉球人行列図錦絵琉球国来聘記」、
「琉球慶賀使略」ほか
4. 来琉外国人
ホール「大琉球航海探検記」、「ペリー提
督日本遠征記」ほか
5. 明治政府と琉球処分
「原忠順日記」、松田道之「奉使琉球始末草
稿」ほか
6. 大正時代の風俗
E.R.Bull旧蔵ガラス写真より
7. 海外移民事情
「布哇の日本人よ」、「南洋諸島国語読
本」、「パラオ支庁勢要覧」ほか
8. 八重山の地方文書
「八重山島諸座御規模帳」、「頭役被仰
付候以来日記」、「山林真秘」ほか



変貌する図書館

医学部分館長 武藤 良弘

江戸時代では、村の長老が亡くなるとその村の「図書館」がなくなったと例えられた。

すなわち、村の長老は単に年長であるばかりではなく、博学であったことから、巷間に「図書館」と呼ばれた所以である。今までは大学の図書館は、学生の教育のための資料、教官などの教育研究に不可欠な印刷資料を保管管理し、情報を提供する場であった。情報を得るためにはわざわざその場に足を運ばざるを得なかった。

ところが、今ではコンピューターの機能がバージョンアップし、かつインターネット化することにより、教育研究に必要な情報を個人のコンピューターで、自由な時間に、新しい情報を迅速に得ることができるようになった。言い換えると、情報は、印刷された冊子から非印刷物(paperless)の時代へと移行しつつある。紙および紙の資源が不必要になり、自然の破壊の防止

や一般廃棄物の減少に繋がる。したがって、現存する書籍等が無くなり、その書籍等を保管管理する場所も自ずと不必要となる。そこで、図書館の役割は情報資源を生産し、保管管理する会社(出版社)と個人との中継場所となる。

危惧される点は、個人で得る情報が興味ある点に偏り、一般社会人としての必要な常識的知識の修得と社会的集団生活が疎かになる可能性が秘められている。江戸時代の博学な長老から必要な情報を直接得ることは、個人のコンピューターで情報提供会社より情報を得るのに良く類似している。図書館の役割の「先祖帰り」とも言えるが、コンピューターでの情報は相手の顔が見えないが、長老から情報を得るときはface to faceの相互の関係が保たれ、一般人としての社会生活に不可欠な常識も得られる。未来もこのような情報化社会を希望する。

9. 沖縄の芸能と工芸

「屋嘉比工工四」、「琉歌百控」、
「組踊集」、「琉球漆器考」ほか

10. インターネットと沖縄関係電子化資料

「琉球語音声データベース」、
「伊波普猷文庫画像データベース」ほか



文献紹介：幕末の異国船来琉記と当時の琉球の状況—③—

—琉球大学附属図書館所蔵沖縄関係資料から—

豊平 朝美

ホールの著書1826年発行の第3版『琉球その他の東海航海記』には有名なナポレオン会見録が収録されている。その別版1840年版の『ジャワ、中国、大琉球航海記』(注1)には会見録の他にアンソンの世界航海記(1740-1744)やウィルキンスの伝記も収録されているが、初版のロンドン版にあった多数の挿絵が省略されている。ナポレオン会見録によると、ホールは琉球訪問後、英国へ帰国の途中、イタリアのセントヘレナ島に幽閉されているナポレオンを訪問する為に同島に立ち寄った。そこでホールはナポレオンに、①琉球には武器がないこと、②戦争をしたことがないこと等琉球についての報告をして、ナポレオンを驚かしている。さらに③琉球の住民は通貨の使用を知らない民で、物を与えても代償をとらないこと(注2)、④琉球では僧侶の地位が低いこと等も報告している。

ホールの琉球についての報告は、その後の外国人来琉記等でも取り上げられている。たとえばペリー提督の『日本遠征記』の中に、「琉球人は攻撃用武器に就いて無知を装っている。そして彼等はこのような物を公然と示すことはない(中略)。ベッテルハイム博士は、彼等の所有している火器を見たことがあるといっている。但し、彼等はその火器を外来者に努めて隠そうとしているとのことである。彼等は天性、平和的人民であることは疑いない。貨幣についていえば彼等は金銀の価値を大層よく知っている。そして彼等は中国銭で取引している」(注3)と記載している。

琉球の僧侶の地位については、ホールは「僧侶は社会において尊敬されていない。彼等は妻帯することも禁じられ、肉食することも許されていない。彼等と交際する住民は少ない。子供すらも彼等を嘲笑するのである。」(注4)と述べているが、「ペルリー日記」では「僧侶は支那の乞食坊主みたようななりはしているけれど、他の東洋諸国においてよりも多大の尊敬を持って待遇されている。」(注5)とホールと反対のことを述べている。

1827年英国船プロッサム号で来琉したビーチ艦長の航海記に、「琉球においては、僧侶は中国におけると同じようにあらゆる階層の人々のために神託の相談を受けるのにかかわらず、非常に無視

され、見下げられている」(注6)と記されている。また、同書にも琉球で中国の銅銭が流通していることが触れられている。

須藤利一はその訳著『異国船来琉記』の中で、「宣教師ベッテルハイムはキリスト教禁教令下の琉球で、布教活動等を行っていたことにより、たえず王府の役人の監視を受け、住民からも迫害を受けていたこと等でホールの琉球観に対して、否定的な見方をもっていた。幕末の駐日英国大使オールコックの著書『日本滞在の3年』の中に記載されているその時々政治によって影響を受けることの強い日本人の傾向を強く非難しているオールコックの言葉を引用して、ホールとベッテルハイム滞留時の島民の態度の差は(中略)この島民の性情と態度を変えた政治的状況の変化に対する認識がベッテルハイムに欠けていたこと等」(注7)を述べている。又、同書で、須藤利一は「ホールの貨幣及び武器に関する報告はある程度歴史的事実であって(中略)、当時の王府の役人が、琉球の現状を隠してホール側に伝えたことによる事も事実である。また、島民の礼儀正しさや、親切なことに関する記述も、誇張でもなければ、欺かれた結果でもない。たまたまホールが良い時期に琉球を訪問し、ある程度自由に島民と接触でき、島民の真情に触れることができた幸運の賜物であって(中略)、ホールの琉球記は、当時の琉球のありのままの姿を、かなり正確にしかも詳しく、初めて欧米人に紹介した貴重かつ興味深い文献である」(注8)とも述べている。

ペリー提督の日本遠征はホールの来琉から40年近く経ってから行なわれた。ペリーは日本を開国し、日米条約を締結するために、日本訪問に先立ち、日本と程遠くない位置にある琉球を艦隊の根拠地とする必要を認め、嘉永6年(1853)年5月26日、上海より、ミシシッピー号等4隻で、琉球那覇港へ寄港した。同年7月江戸湾に入り、徳川幕府と交渉したが、難渋を極めて、那覇へ引返した。1854年2月、再び江戸を訪問し、同年3月31日、遂に日米和親条約締結に成功した。琉球訪問以来那覇に入港すること5回に及んだ。その間、那覇泊での石炭貯蔵所の確保、沖縄本島周辺の水路調査、

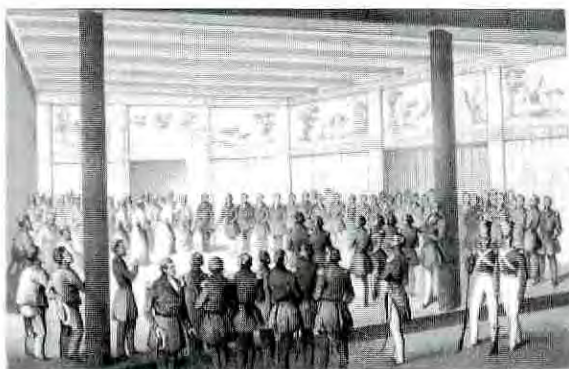
奥地探検等を行なっている。

ペリー一行は1853年6月6日と1854年2月3日に2度首里城を訪問し、北殿に於いて歓迎式を受けたが、ペリーは幼少の国王尚泰に謁見することはできなかった。琉球王府は摂政宅と称して中城王子御殿（国王世子邸宅で現県立首里高等学校跡）でペリー一行を供応した。ペリーは1854年7月11日に琉球王府と琉米修交条約を那覇公館(天使館)で結び、所期の目的を達して、香港を經由して米国に帰還した。その際に琉球王府からペリー提督へ要請のあった英国宣教師ベッテルハイムを連れかえり、同師を香港で降ろしている。(注9)『ペリー提督日本遠征記』は米国合衆国ペリー提督指揮のもとに、1852年から1854年に亘って行なわれた米海軍の東洋遠征を取めた本で、3巻で構成されている。同書にはハイネやブラウンによる興味深い沖縄の風景画、人物画等多数収録されている。第1巻は、訪問した国々の人物、風物等記した一般的な遠征記録である。第2巻は遠征隊士官の調査に基づく寄港した国々の動植物、気候、風俗習慣、農業、地質、地図などの報告が収録されている。第3巻はミシシッピー号牧師ジョウズ氏による天文学上の観測記録である。ペリー遠征記はペリー自身の日記をもとに、遠征に加わった多くの人々の記録を彼の友人、フランシス・ホークス氏によって編纂されている(注10)。その他、ペリー直属の主席通訳官サムエル・ウイリアムズ博士の日記『A Journal of the Perry Expedition to Japan』(1853-1854)も1910年に彼の子息によって編纂されている。この日記について、洞富雄訳著『ペリー日本遠征随記』の和訳がある。「ペリー提督日本遠征記」の和訳について、沖縄に関するものだけを収録した

ものに、大正15年出版の神田清輝訳著の『ペルリ提督琉球訪問記』、昭和37年出版の外間政章訳著『対訳ペリー提督沖縄訪問記』等がある。外間訳著本は英文と和文の対訳になっている。更に、同書は注記で沖縄独特の地名や役職名等に説明がなされており、読者に一層の理解ができるようになっている。

(とよひらともみ: 図書館専門員)

- 注1 Narrative of a voyage to Java, China and the Great Loo Choo Island;., and of an interview with Napoleon/ Basil Hall, London, 1840 (K290.99/HA)
- 注2 鎖国令下の琉球で外国人に対して交易の口実を与えない琉球王府の政策が窺える。(照屋善彦執筆「十九世紀琉球の風俗」参照 『風俗史学』13号所収)
- 注3 外間政章訳著「対訳ペリー提督沖縄訪問記」(K290.99/PE)参照。p.47
- 注4 伊波月城執筆「ベジルホール琉球探検記」大正元年11月6日沖縄毎日新聞記事(マイクロフィルム)
- 注5 伊波月城執筆「ペルリー日記」大正2年6月16日沖縄毎日新聞記事(マイクロフィルム)
- 注6 大熊良一訳著『ブロッサム号来琉記』(K290.99/O55)参照。p.95
- 注7 須藤利一訳著『異国船来琉記』(K290.99/Su14)の解説参照。p.439
- 注8 須藤利一訳著『異国船来琉記』解説参照。p.440
- 注9 外間政章執筆『ペリー提督の琉球遠征記』(南島史論所収)参照。200.4/R98
- 注10 外間政章訳著「対訳ペリー提督沖縄訪問記」(K290.99/PE)訳注者自序参照。



左: 首里城内(北殿)で交歓するペリー一行
『ペリー提督日本遠征記』1856年



右: 琉米修交条約(当館所蔵の写し)

お知らせ

◎ 開館案内 2002年1～3月

1月							2月							3月						
日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5						1	2						1	2
6	7	8	9	10	11	12	3	4	5	6	7	8	9	3	4	5	6	7	8	9
13	14	15	16	17	18	19	10	11	12	13	14	15	16	10	11	12	13	14	15	16
20	21	22	23	24	25	26	17	18	19	20	21	22	23	17	18	19	20	21	22	23
27	28	29	30	31			24	25	26	27	28			24	25	26	27	28	29	30
														31						

- ・開館時間 通常期：月～金 [黒字] 8:30～22:00 土・日・祝 [緑字] 13:00～20:00
- ・ 休業期：月～金 [青字] 8:30～17:00 土・日・祝 [赤字] 休館
- ・休館日 土・日曜（冬季休業：12/25～1/6）、年末年始（12/28～1/4）、センター・琉大入試(1/19-20,2/25-26)、定例休館日（1/18,3/22）

※ 本館では当月、翌月の開館案内（カレンダー）を入り口及び掲示板に掲示しています。ご留意ください。（年間の開館案内はホームページをご覧ください）



☆は休業期（上映13:30～）
 その他は通常期（上映①15:00～）
 （上映②18:00～）
 上映場所：琉球大学附属図書館
 1階 多目的ホール
 又は1階AV視聴室(共同学習室)

【1月の予定】

- ☆1月9日(水)ロッキー：Rocky/監督：J.G.アヴィルドセン/1976/アメリカ映画 120分
- 1月16日(水)鉄路の白薔薇：LA ROUE/監督：A.ガンス/1922/フランス映画 196分
- 1月23日(水)夜の大捜査線：IN THE HEAT OF THE NIGHT/監督：N.ジュイソン/1967/アメリカ映画 105分
- 1月30日(水)真夜中のカウボーイ：MIDNIGHT COWBOY /監督：J.シュレシンジャー/1969/アメリカ映画 164分

【2月の予定】

- 2月6日(水)ドイツ零年：GERMANIA ANNO ZERO /監督：R.ロッセリーニ/1947/ イタリア映画 91分
- 2月13日(水)戦火のかなた：PAISA /監督：R.ロッセリーニ/1946/イタリア映画 127分
- ☆2月20日(水)革命前夜：Prima Della Rivoluzione/監督：B.ベルトルッチ/1964/イタリア映画 112分
- ☆2月27日(水)愛と哀しみの果て：OUT OF AFRICA/監督：S.ボラック/1985/アメリカ映画 161分

【3月の予定】

- ☆3月6日(水)スパルタカス：SPARTACUS/監督：S.キューブリック/1960/アメリカ映画 197分
- ☆3月13日(水)イワン雷帝：ИВАН ГРОЗНЫЙ /監督：C.エイゼンシュテイン/1933/ソ連映画 209分
- ☆3月20日(水)アラビアのロレンス：LAWRENCE OF ARABIA /監督：D.リーン/1962/アメリカ映画 226分
- ☆3月27日(水)マイフェアレディ：My Fair Lady /監督：G.キューカー/1964/アメリカ映画 173分

琉球大学附属図書館報 “びぶりお” 第35巻 第1号（通巻第133号）
 平成14年1月1日発行
 発行：琉球大学附属図書館 〒903-0214 沖縄県中頭郡西原町千原1番地
 電話 098(895)8168 Fax.098(895)8169